

農村保健研修センターと JICA 研修について

出浦喜丈 元人間ドック部長兼国際保健医療科医長、農村保健研修センター嘱託医師

1. 農村保健研修センター（以下研修センター）は、1977年に開設され、今年めでたく40周年を迎えた。研修センターは、農村で働く保健医療従事者の現職研修に大きな役割を果たして来た。この40年間は、社会構造や医療環境の変化も大きく、研修センター運営には様々な困難もあったと思う。佐久病院の若い職員には農村保健研修センターをよく知らない人やセンターに来たことのない人も多いのではないかと思う。佐久病院の若いスタッフには、若月俊一先生のセンター開設時の志や研修計画を改めて見つめ直してみしてほしい。そうすることで、先生の志や研修センターの存在意義が改めて理解できると思う。若月俊一先生の始められた、日本の農村で働く保健医療従事者に、佐久の農村保健の経験を教えて、日本の農村保健の向上を図りたいという志を思うと、研修センターで途上国からの研修員を受け入れ、佐久や日本の農村保健や地域保健の経験を共有し、途上国の農村保健や地域医療の向上をめざしてアジアやアフリカなど途上国の研修員を対象にした研修を行う意味が理解できると思う。佐久病院では1996年に国際保健医療科が創設され、病院として国際協力を進めることになり、筆者も1997年から1999年まで国際協力機構 JICA から西アフリカのガーナに派遣され、途上国での保健医療を体験した。派遣された JICA プロジェクトでは、ガーナの保健医療従事者の現職研修制度作りに関り、農村保健研修の重要性を身をもって体験した。このことから、帰国後は、佐久病院の国際保健医療科の主要な任務の1つとして、JICA 研修の受け入れを進めて来たが、臨床や人間ドック診療もあり、病院中心の短期間（1～数日）の研修を行なうにとどまっていた。農村保健の包括的な研修には、病院のみならず地域全体の活動を、より時間をかけて行う必要があると感じていた。このことで、日本農村医学会に提言書を提出したり、研修センターの運営委員会に研修実施を提案したりもしていた。2007年5月に研修センター最初のグアテマラ小児保健プロジェクトの2週間のカウンターパート(CP)研修を佐久穂町と協力して行うことができた。その後、鈴木清康研修センター前課長が赴任した2008年よりは JICA の委託を受けて、インドネシア青年研修事業が始まり、ようやく、農村保健研修センターで、研修期間2週間程度の予定で、より包括的な農村保健研修を地域の自治体や団体と協力して始めることができるようになった。

2. 農村保健研修センターでの JICA 関連研修は、最初のグアテマラ母子保健プロジェクトのカウンターパート研修を皮切りに始まったが、JICA 駒ヶ根研修所の委託を受けて、2008年11月に新たに始めたインドネシア青年研修事業は、2016年まで地域保健管理運営研修コースや生活習慣病予防研修コースとして8年間継続して実施された。さらに、パキスタン、スリランカなどからの2週間の青年研修事業”地域保健管理運営コース”も委託実施するなど、毎年受け入れが続いて来た。多くのインドネシアの青年研修員を始め、途上国の青年研修員が農村保健センターに2週間滞在し、合宿生活を経験した。鈴木課長の献身的な

お世話もあり、日本人の生活や働き方、日本の文化や生活を合わせて体験し、帰国後も、彼らは、熱烈な研修センターのファンになっている。この他にも、毎年様々な形で、研修実施を依頼されることとなり、後述のごとく、総計 200 名以上の途上国の研修員を受け入れて来た。また、インドネシアの青年研修に加えて、特記すべきことのひとつは、2013 年に実施したスリランカ青年研修のその後の進展である。後述のごとく、研修員のアクションプランは、帰国後、保健省に提案されて、同国保健省の承認を受けて、スリランカの高齢者ケア政策プランモデル形成プロジェクトとして実施されることになった。このプロジェクトは、地域提案型の JICA 草の根事業として、佐久穂町を提案団体、研修センターを実施団体として 2015 年 1 月～2017 年 3 月まで実施されることとなった。

2007 年以降の主な JICA 研修受け入れ実績は以下の通りである。

2007 年:グアテマラ小児保健プロジェクト CP 研修 2 名受け入れ(5 月)

2008 年:インドネシア青年研修員 18 名受け入れ(11 月)

2009 年:グアテマラ小児保健プロジェクト CP 研修 2 名受け入れ(5 月)

:インドネシア研修員 17 名受け入れ(10 月)

2011 年:青年研修関連で HANDS 受託研修である上級官僚対象のインドネシア国別研修「地域保健」17 名を受入れ(5 月)

:インドネシア青年研修 15 名受け入れ(11 月)

2012 年:インドネシア青年研修 17 名を受入れ(11 月)

2013 年:スリランカ青年研修 19 名受け入れ(7 月)

:インドネシア青年研修 14 名受入れ(11 月)

2014 年:インドネシア青年研修 13 名受け入れ(11 月)

2015 年:パキスタン青年研修 11 名受け入れ(1 月)

:スリランカ CP 研修 7 名受け入れ(5 月)

:スリランカ CP 研修 11 名受け入れ(9 月)

:インドネシア青年研修 13 名受け入れ(11 月)

2016 年:スリランカ CP 研修 15 名受け入れ(5 月)

:インドネシア青年研修 13 名受け入れ(11 月)

この他にも、短期間の JICA 関連研修を、国内他機関の依頼で、ベトナム、西アフリカ、ザンビアなどから、分野別研修や地域別研修コースの一部として受け入れて来た。

3. JICA 草の根協力事業”スリランカの高齢者ケア政策プラン・モデル形成プロジェクト”について。

研修センターとしては初めての具体的な途上国での支援協力活動となったこのプロジェクトは、前述のごとく、2013 年 7 月にスリランカ青年研修実施後、ほぼ 1 年間の準備期間を経て、2015 年 1 月—2017 年 3 月の 2 年間、JICA 草の根支援協力プロジェクトとして、スリランカ保健省をカウンターパートとして実施された。青年研修員らの支援もあり、またス

リランカ保健省から、30名に及ぶ研修センターでのCP研修も大きな力となり、CPの積極的な協力が得られたこのプロジェクトは、スリランカの高齢者ケアの保健省の基本政策づくりを支援して、スリランカの高齢者ケアの先駆けとなった。プロジェクトの主要な活動は、スリランカでは初めての保健省の高齢者ケア基本方針を示すポリシーを作成し、この政策を実行を支援することであり、やはり、スリランカでは初めての高齢者ケアのための現職研修を計画実施し、プロジェクト期間中に600名の保健省スタッフの高齢者ケア研修を実施した。また、ナワラピティア地区総合病院やカドガンナワ地区病院で、高齢者に優しいモデル病院つく進めるとともに、スリランカで従来使われて来た患者ノートをもとに、高齢者ケアノートを導入し、このノートを活用したコミュニティベースの高齢者ケアモデルづくりをウワ州バドウラ県で進めた。提案団体である佐久穂町の協力も得て実施されたこれらのプロジェクトの活動に対しては、終了時には、保健大臣からプロジェクト関係者に感謝状を授与されるなど、研修センターが実行主体として実施したプロジェクトとして、大きな成果を上げることができたと思う。

これまで述べた研修センターでの活動は、1977年の研修センターの発足時の若月先生の理念と志を継いだもので、農村保健研修の大切さと国際協力分野での研修センターの役割と可能性を改めて示すことができたと考えている。今後も、初心を忘れずに、若月俊一先生の志を継いで、農村保健研修センターが、途上国の農村保健の促進するために、おおいに力を発揮して行くことを期待します。

写真と説明

インドネシア青年研修グループの人形劇実習風景（2012年11月）：



2008年以來研修センターで保健大学卒業生グループの指導を受けて人形劇が行われ、スクリプトは、インドネシア語に翻訳されて現地で活用されている。

スリランカ青年研修グループのアクションプラン発表風景（2013年7月）：



2008年から、青年研修では、毎年、研修終了時にグループごとにマインドマップを使ったアクションプランを作成している。

2013年のスリランカグループの高齢者ケアプランはその後草の根プロジェクトに発展した。

研修センターのカウンターパート研修風景（2016年5月）



スリランカ高齢者ケア政策プラン・モデル形成プロジェクトのカウンターパート研修は、3回にわたり合計32名の同国保健省スタッフを対象に、研修センターをベースに、提案団体の佐久穂町などで行われ、同国の高齢者ケア政策作成に貢献した。

交流会で日本舞踊を踊る鈴木清康前研修センター課長：



研修センター滞在中に日本人の働き方や文化を知ってもらうことも大切な分野です。合宿のような2週間の共同生活は一生の思い出になっています。